

オミクロン株と柴葛解肌湯



先日、日経メディカルオンライン(2022/1/21)に「新型コロナウイルスのオミクロン株に柴葛解肌湯(葛根湯と小柴胡湯加桔梗石膏の代替エキス剤併用)が有用かもしれない」という記事が載っていました。今年1月の1週間での1クリニックからの報告なのでエビデンスの質は低いですが、コロナ陽性者37名(デルタ株陰性24人、不明13人)に対して4種類の漢方薬を使ったところ、投与24時間以内に解熱、症状軽快した人が32人(有効率86.5%)だったとしています。特に「柴葛解肌湯」は29人(処方率78%)に投与されており、大半の症例で著効したとあります。またデルタ株時代にも柴葛解肌湯を投与していた際の症状軽快までは3日程度を要していたのが非デルタ株(現状ではおそらくオミクロン株としています)には症状軽快まで1日程度が大半であったとしています。肝心な部分での具体的な数値が所々で明記されておらず慌てて報告した感が満載の報告ですが、今回は柴葛解肌湯について。

1) 中医学処方と新型コロナウイルス

2年前の本ニュース302号で紹介しましたが、当時中国では武漢株が猛威を振るっており「新型コロナウイルス肺炎診療ガイドライン第7版2020年3月」が出され、その煎じ薬を日本のエキス剤で代替する際の併用例を報告した金沢大学病院漢方医学科の小川恵子教授のMedical Tribune 2020/3/31の記事を載せました。中医学処方では日本では使用されていない生薬も用いられ、また煎じ薬なので患者個々の特徴に応じた生薬の分量調整が可能ですが、代替エキス剤併用ではそれらをカバーできない欠点があります。当時のエキス剤の併用例を証別に列記すると以下になります。

- ①寒湿鬱肺証(カシツツハイ)：「麻杏甘石湯+参蘇飲+平胃散」又は「越婢加朮湯+麻黄湯」
- ②湿熱蘊肺証(シツツツハイ)：「荊芥連翹湯+半夏厚朴湯」、消化器症状強い時は「柴苓湯+平胃散」
- ③湿毒鬱肺証(シツトクツツハイ)：「麻杏甘石湯+竹茹温胆湯+薏苡仁」(便秘時；左記+大黄甘草湯)
- ④寒湿阻肺症(カシツツハイ)：「麻杏甘石湯+五積散+大承気湯」(呼吸困難時；「竹茹温胆湯+柴陷湯」)
- ⑤気營両燔証(キエイリョウハン)：「荊芥連翹湯+滋陰降火湯+桔梗石膏」
- ⑥内閉外脱証(ナイヘイゲダツ)：「竹茹温胆湯+柴陷湯」(腹満、便秘、煩躁を伴う時；大承気湯)

証により配合される生薬は異なりますが、「麻黄」と「石膏」が散見される印象があります。今回のテーマである柴葛解肌湯にも「麻黄と石膏」が入っています。

日本では麻黄湯がコロナウイルスと同じRNAを遺伝子としてもつインフルエンザウイルスに有効だとして抗インフルエンザウイルス薬と共に併用される場合があります。様々な報告がありますが、寺澤捷年著「和漢診療学新しい漢方2015年」では麻黄湯に含まれる「麻黄の成分のエピカテキン」がウイルスを膜でつつみ込みRNA遺伝子複製を抑える、「桂皮の成分のシンナムアルデヒド」がウイルス蛋白質の合成を抑えるとの記載があります。本ニュース408号でも触れたようにコロナウイルスとインフルエンザウイルスではRNAの蛋白質情報の有無が正反対になっていますから、エピカテキンやシンナムアルデヒドがコロナウイルスにも効果があるかどうかは不明ですが、麻黄は何らかの抗コロナウイルス効果もしくはコロナウイルス感染症状の緩和効果があるのかもしれない。

2) 柴葛解肌湯(サイカゲキトウ)とは

①生薬の構成

大塚道明著「漢方処方解説 1974 年」によると傷寒論の解説版にあたる傷寒六書に出てくる処方ですが日本では浅田家の改良処方が一般に用いられるとあります。生薬構成は以下になります。

柴胡、黄芩、桂枝(桂皮)、半夏、葛根、芍薬、麻黄、石膏、乾生姜(生姜)、甘草

柴葛解肌湯のエキス剤はありませんから、今回の報告では葛根湯エキス(下線)と小柴胡湯加桔梗石膏エキス(波線)が代替併用されています。二重下線が両エキス剤で重複する生薬で、柴葛解肌湯に含まれていない生薬が、大棗、人参、桔梗の3生薬になります。

②応用例

感染症で特殊の病態を呈し、麻黄湯や葛根湯の2つの証が解消せず、しかも少陽の部位(半表半裏)に邪が進み、嘔吐や口渴が甚だしく、四肢煩疼(手足の痛み)するものによいと、流行性感冒、肺炎の一証、諸熱性病の一証として現われるとしています。また肝の気の高ぶりから発狂するものに用いることがあるとしています。太陽病と少陽病と陽明病の3つの陽病が合併した複雑な病態になります。

目標は、頭痛、口渴、不眠、鼻乾き、鼻血、悪寒して汗なく、四肢痛み、脈洪数のものになります。

今回の報告ではコロナウイルスに著効を示したとしています。インフルエンザウイルス感染症にも応用できそうな処方です。

③生薬の役割

太陽病対策：葛根、桂皮、麻黄、芍薬により太陽病による熱を冷ます。

少陽病対策：柴胡、半夏、芍薬、甘草により心下部、肝部、胸脇部を和らげ、少陽病の熱を冷ます。

陽明病対策：石膏が裏に及ぶ熱を冷ます。

3) 柴葛解肌湯とエキス剤併用による生薬量の違い

柴葛解肌湯の各生薬の1日量は前述した漢方処方解説と富山医科薬科大学時代の和漢マニュアル1991年に掲載されている約束処方量の2つを示し、葛根湯エキスと小柴胡湯加桔梗石膏エキスはツムラの製品の抽出前の1日量相当の生薬g数で示す。ゴシック体はエキス併用時の重複生薬、1日量を示す。

	葛根	麻黄	桂皮	芍薬	甘草	生姜	柴胡	半夏	黄芩	石膏	大棗	人参	桔梗
柴葛解肌湯(処方解説)	3.0	2.0	3.0	3.0	1.0	1.0	4.0	3.0	3.0	5.0	—	—	—
柴葛解肌湯(富山医薬大)	4.0	2.5	2.0	2.0	1.0	1.0	4.0	3.0	2.0	6.0	—	—	—
ツムラのエキス併用	4.0	3.0	2.0	2.0	4.0	3.0	7.0	5.0	3.0	10.0	6.0	3.0	3.0

- ・処方解説と富山医薬大の1日用量は多少の違いはありますが、ほぼ同じと考えてよいでしょう。
- ・エキス併用では小柴胡湯加桔梗石膏エキス由来の柴胡と半夏と石膏の量が多くなっています。ツムラ小柴胡湯エキスの柴胡、半夏の同量なので量的には問題はないと思われます。石膏は倍量になりますが石膏の熱を冷ます作用がより効果を増すので決してマイナス方向には働かないと思われます。生姜は併用により多めの3倍量となっていますが、胃腸を温めて気を増す作用や発汗作用もあるので短期間の増量ならばあまり気にする必要はないと思われます。本来入っていない大棗も倍量になりますが消化機能を助け、気持ちを落ち着ける穏やかな生薬なのでこれも問題はないでしょう。人参は気を高める作用や水を生じて喝を潤す作用があり、桔梗は傷寒六書の原典に元々入っており鎮咳去痰作用があるので、それぞれ証にあった追加生薬と考えれば納得できる範囲内と思われます。
- ・エキス併用で明らかに問題になるのは「甘草の量が柴葛解肌湯の4倍量」になっている点です。よく知られた副作用ですが「偽アルドステロン症」の発症に注意が必要になります。コロナウイルス感染対応であれば恐らく短期間の利用にとどまるはずですが、元々高血圧のある患者さんや心不全のある患者さんでは血圧上昇、浮腫の悪化や体液貯留には注意が必要になる可能性があります。(終わり)